

心穏やかに「きく」こと

安城中部小学校長 稲留 雄一

「暑さ寒さも彼岸まで」。年々この言葉にそぐわない天候に苦労していますが、ようやく秋の訪れが感じられるようになりました。

秋と言えば、今年も中部小学校のコオロギシーズンの幕開けです。体育館の南の草むらでは、虫取り網や帽子を器用に使って、コオロギとのやり取りをたくさん子どもたちが楽しんでます。息を止めて、抜き足差し足。ぐっと目を大きく見開き、そおと顔を近づけ、コオロギの気持ちになって、次の動きを読んで、「エイッ」。今日の成果を私に見せてくれます。思ったよりも大きなコオロギに驚くこともあります。



朝夕には、美しい声も聴かせてくれます。何種類くらいの虫が鳴いているのでしょうか。それほど詳しくない私ですので、数種類の違う虫が鳴いているのはわかるのですが、その名前まではわかりません。先日6年生と修学旅行で泊まった宿には、鈴虫が鳴いていました。はじめは館内に流れるBGMなのかと思っていた子どももいたようですが、本物の鈴虫の声でした。とても美しく澄んだ鳴き声にしばし癒されました。

「きく」は「聞く」「聴く」「訊く」とも書きます。日本語の難しいところであり、日本語の奥ゆかしさでもあると感じます。

「聞く」とは、英語で「hear」。耳から自然に入ってくる音や言葉を感じ、認識することだそうです。

「聴く」とは、英語で「listen」。「聞く」よりも注意を傾けて、相手の感じていること、伝えたいことを理解しようと心を込めて「きく」ことだそうです。

「訊く」とは、自分の興味や関心から沸き起こった知りたいことを質問したり尋ねたりすることだそうです。英語で「ask」「question」等。

私たち大人は、子どもたちの言葉をどのように「きく」とよいのでしょうか。子どもが一生懸命に語っている言葉をただ「聞く」だけになっていないでしょうか。こうしたことの繰り返しの中で、子どもたちはきっと話すことをやめてしまいます。大人が誠意をもって「聴く」姿を大切に子どもたちに接することができれば、その経験は、聴いてもらえた嬉しさにつながり、自分が大切にしてもらっているという自己肯定感にもつながっていくに違いありません。さらに、その話の内容について「訊く」姿勢が加われば、子どもは自分自身でも気づいていないことまで考えたり、それを言葉にしたりしてくれるかもしれません。自分に興味をもってもらっているという喜びや大切にもらっているという感情は、まわりまわって相手への思いやりや優しさにつながるのではないのでしょうか。

しかし、気をつけなければならないこともあります。時に「訊く」をこちらの都合ばかりで子どもたちに向けてしまえば、それは「尋問」になってしまい、一気につらい場面に子どもを追い込んでしまいます。

今年の秋は、穏やかな心持ちで「きく」の違いを少しだけ意識しながら、耳を澄ませてみましょう。もしかしたら、今まで聞こえていた音が、声が、違って「きこえて」くるかもしれません。相手を大切に「きく」ができるようになりたいものです。

